

## 床上排便後の汚臭軽減のためのケア

### How to Reduce The Smell of Bed Defecation

東5階病棟：小野明子・中田藍・山村久美子・佐久間いく美・

中村和代・長尾章弘・薄井美里・根井きぬ子

#### 《要旨》

患者の生活環境を整える視点で、排泄による汚臭を調整することは重要である。看護手順の検討とスプレー型消臭剤使用により、床上排便後の汚臭の軽減を図ることができた。空気中に消臭剤の分子が残る消臭法では、ニオイセンサーによる客観的評価は適さない。臭いの快・不快は人間が感じる感覚であり、主観的評価は、個人的な差や嗅細胞の疲労による影響を考慮しても指標として採用されるべきである。

#### 《キーワード》

床上排便後の汚臭、看護手順、評価指標

#### I. はじめに

脳神経外科病棟は意識障害・運動機能障害を伴う患者が多く、病室内で排泄する機会が多い。患者の生活環境を整える視点で、排泄による汚臭を調整することは重要である。看護手順の検討と消臭剤使用により、床上排便後の汚臭の軽減を図ることができたので報告する。

#### II. 研究目的

床上排便後の汚臭を軽減する看護手順の検討

#### III. 研究方法

1. 調査期間：平成17年10月～平成18年2月
2. 調査対象：遷延性意識障害により床上排便をしている個室入院中の患者2名。食事内容が便臭に影響しないよう、濃厚流動食注入患者に特定した。
3. 倫理的配慮：研究目的、方法、プライバシーの保護、参加協力は任意でありいつでも中断可能であること、中断が看護に影響しないことを家族に紙面で説明し、同意を得た。
4. 看護手順  
A：従来の手順

B：新しい手順…従来の手順に以下の項目を追加

- 1) 使用後のオムツはすぐにビニール袋に入れ密封する
- 2) 便器の蓋はすぐに閉める

C1：新しい手順+滴下芳香剤（以下滴下型）

便器内に1滴入れてから陰部洗浄を行う

C2：新しい手順+無香料消臭スプレー（以下スプレー型）

退室時に患者の足元に2～3秒スプレーする

各手順をA・B・C1・C2とした

## 5. 評価方法

- 1) 客観的評価：ポータブル型ニオイセンサー（COSMOS）測定値の平均でT検定を行った。
- 2) 主観的評価：厚生労働省で定められた6段階臭気強度表示法（表1）の平均値を求め、スピアマンの順位相関で統計処理を行った。

判定者は嗅覚測定用基準臭にて嗅覚が正常であることを確認した6名。

それぞれオムツ開放時・退室時・退室15分後に測定した。

表1 6段階臭気強度表示法

臭気強度	臭いの程度
0	無臭
1	やっと感知できる臭い
2	何の臭いであるかわかる弱い臭い
3	楽に感知できる臭い
4	強い臭い
5	強烈な臭い

#### IV. 結果

##### 1. 客観的評価 (図1)

全ての手順において有意差はなかった。

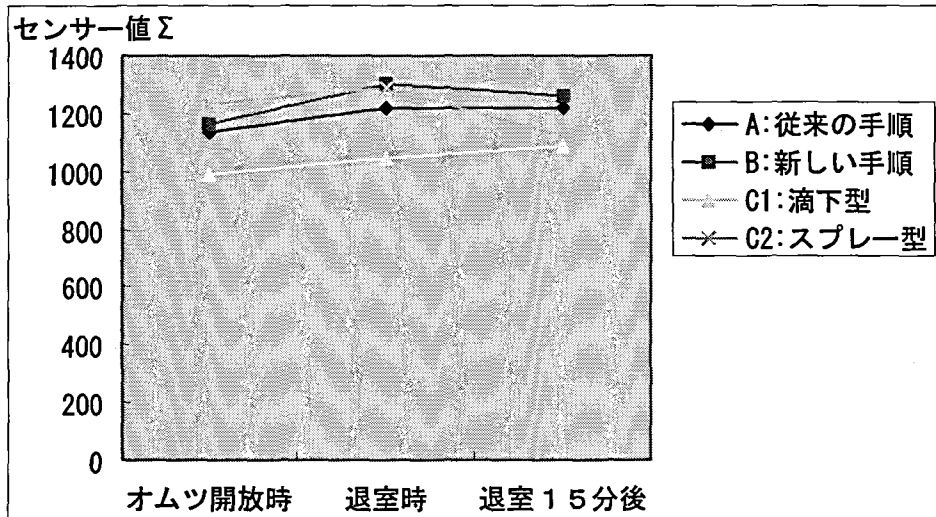


図1 客観的評価の結果 (センサー値の平均値)

##### 2. 主観的評価 (図2)

Aでは、オムツ開放時3.0、退室時3.5、退室15分後3.3であった。

Bでは、オムツ開放時2.8、退室時2.4、退室15分後2.6であった。

C1では、オムツ開放時3.4、退室時1.5、退室15分後1.8であった。

C2では、オムツ開放時4.0、退室時0.9、退室15分後1.2であった。

有意差が見られたのは、C2のみであった。

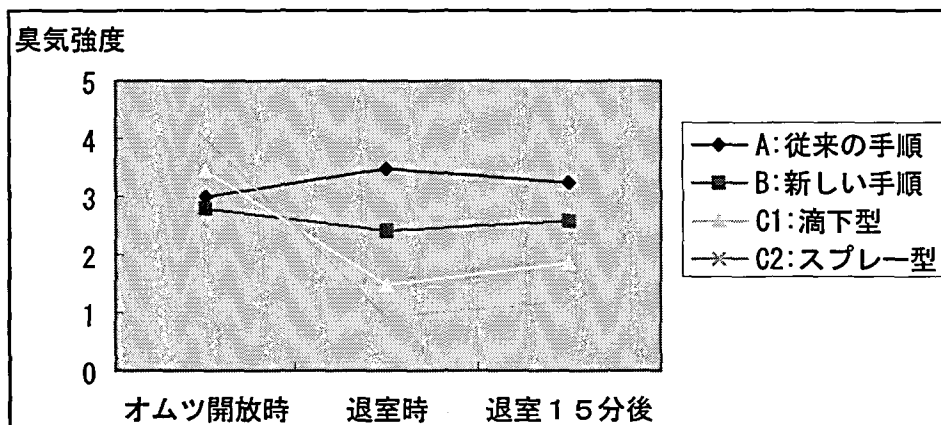


図2 主観的評価の結果 (臭気強度の平均値)

## V. 考察

便臭の主成分は、インドール・スカトール・メルカプタン等であり、この分子が空気中に拡散し充満するために嗅覚として感じる。嗅覚には個人差があること、臭いを感じる嗅細胞が疲労すると、適応・順応・慣れの機序により正確なデータが得られにくい。

そこで、客観的指標として、COSMOSのニオイセンサーを使用し測定した。結果、どの手順・時期においても差がなかった。客観的評価で差がなかったのは、以下のように説明できる。消臭剤における消臭メカニズムは大きく分けて4種類、化学的消臭法・物理的消臭法・生物的消臭法・感覚的消臭法である。今回採用した消臭剤は、化学的消臭法と感覚的消臭法によるものであり、消臭剤の分子がそのまま空気中に残るため、ニオイセンサーに感知された。空気中に消臭剤の分子が残る消臭法では、ニオイセンサーによる評価は適さない。

今回、主観的評価では「従来の手順」と「スプレー型」で統計的有意差を認めた。この理由は、スプレー型消臭剤が悪臭成分を化学反応で無臭成分に変えるためである。

臭いの快・不快は、人間が感じる感覚である。主観的評価は、個人的な差や嗅細胞の疲労による影響を考慮しても、指標として採用されるべきである。

## VI. 結論

- ・「新しい手順+スプレー型消臭剤」で汚臭軽減ができた。
- ・臭気強度を評価する場合は、採用する消臭法により、評価指標を選択する必要がある。

## 参考文献

- 1) 久保田裕香ほか：排便後の病室内における便臭拡散の実態と消臭方法の検討，第29回日本看護学会論文集（看護総合），205-207，1998.
- 2) 五味常明、須藤章：介護・臭いで困っていませんか，講談社，2001.
- 3) 信州大学医学部附属病院看護部：スキルアップとトラブル解決，p. 10-13，メチカルフレンド社，2004.